

フォーガットン

2005(平成17)年8月21日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★★



監督=ジョセフ・ルーベン/出演=ジュリアン・ムーア/ゲイリー・シニーズ/ドミニク・ウェスト/アンソニー・エドワーズ/アルフレ・ウッダード/ライナス・ローチ (UIP 配給/2004年アメリカ映画/92分)

……この映画はミステリー仕掛けだが、その本当のテーマは母親と子供の絆の強さ！ 14カ月前に起こった飛行機事故で9歳の愛する息子を失った母親は今なお茫然自失状態。やさしい夫と精神科医は、それを立ち直らせようと必死。しかし主人公の目の前からは、次々と息子の存在を示す資料が消えていく。それは一体なぜ？ 誰が？ 何のために……？ 「記憶」をテーマとしたミステリーものの1つだが、説得力は十分。何がホントで何がウソか？ 騙されないよう十分ご用心を……。

結末を明かすことは……？

近年のミステリー映画の代表作は何といっても、シャマラン監督の『シックス・センス』(99年)。これが大評判をよび、以降シャマラン監督は『アンブレイカブル』(00年)、『サイン』(02年)、『ヴィレッジ』(04年)と次々とシャマラン流ミステリー映画をつくったが、それらに共通するルールは、「決して結末を明かさなさいください」ということ。

この『フォーガットン』という映画は、シャマラン映画ほどその趣旨を徹底していないが、ミステリー映画として、そのルールの大切さは同じ。したがって私の評論においても、「ネタバレ」だけは決してしないように……？

「記憶」をテーマにしたたくさんの映画

「死者」をテーマとしたミステリーは、上記のとおりシャマラン監督の『シッ

クス・センス』が代表作だが、他方、「記憶」をテーマとした映画の代表が、『エターナル・サンシャイン』（04年）や『ロング・エンゲージメント』（04年）。

『エターナル・サンシャイン』は機械の力を使って、目的意識的に人間の中のある部分の記憶を消そうとするのに対し、近々日本で公開される韓国映画『私の頭の中の消しゴム』は、若年性アルツハイマー症のために少しずつ記憶を失っていき、ついには夫の顔すら思い出せなくなっていく女性を主人公に描いたもの。これらはいずれも、頭をひねりながら集中してスクリーンを観ていなければならないちょっとややこしい作品（？）だが、結構面白いはず……？

日本でも「死者」をテーマとして美しい夫婦愛を描き、日本中の涙を誘った映画が中村獅童と竹内結子共演の『いま、会いにゆきます』（04年）。言うまでもなく「フォーガットン」とは forget（現在形）、forgot（過去形）に続く過去分詞形の forgotten のこと。さて、この『フォーガットン』とは、一体何を「忘れてしまった」ということなのだろうか……？

面白い導入部

この映画の導入部分30分はすごく面白い。主人公のテリー（ジュリアン・ムーア）は、やさしい夫ジム（アンソニー・エドワーズ）と主治医である精神科医のマンズ（ゲイリー・シニーズ）に見守られながら、愛する息子サムを失った悲しみからの精神の回復に懸命となっていた。9歳の愛する一人息子のサムを飛行機事故で失ったのは14カ月前。忘れようと思っても忘れることができず、その痛みから立ち直ることのできない母親の姿。それはどこにでもよくある姿のはずだったが……？

人間の記憶なんて……？

サムが楽しそうに遊んでいるビデオテープを観たり、思い出のいっばいつまった野球のクラブや帽子を手にしたり、そして家族3人の写った写真を見つめたり……。そんなことをしても、サムが帰ってくるわけではないが、人間にはどうしても切れない過去の思い出があるもの……。ところが日を追うにしたがって、写真からサムの姿が消え、ビデオテープは再生されなくなり、そのうえあったはず

のグラブや帽子が消えていった……。それは一体なぜ……。そして誰が……？

それに対するジムやマンズ医師の説明は、テリーにとっては何ともショッキングなもの。すなわちそれは、「そんなものは元々存在しない。それらはすべて君が勝手につくりあげていた妄想なんだ！」というもの……？

もっとも、そう言われると、私にだって、酔っぱらって翌朝目覚めた時、昨日はどこで飲み、どの道を通って帰ったのか？ 家についてからフロに入ったのか？ 髪を洗ったのか……。サテ……。というようなことは時々経験するもの。このように、そもそも人間の記憶なんて……？

なぜテリーだけが……？

このミステリー映画の結末は決して明かせないが、この映画のストーリー構成を成立させる重大な要素が、テリーの母親としての子供に対する強烈な愛。当然といえば当然だが、実はこれにも大きな個人差がある。たとえば昨今は、若くして母親になったある女性は自分がパチンコ遊びに夢中になるあまり、わが子のことを忘れてしまっていた、などというニュースもあった。この若い母親にとっては、手のかかる子供の動向よりも、パチンコ玉の出方の方が気にかかっていたということだ。しかし、テリーは……？

この映画の中には再三、テリーが息子サムを飛行機に乗せるときのシーンが登場する。愛する息子が元気に旅立つよう見送るという、どこにでもあるシーンだが、テリーの場合は、サムの一挙手一投足をどこまでも正確に、そして鮮やかに……。もちろんこれは映画の中の世界だから表現できることだが、サムについてのこれだけ正確な記憶の復元力がテリーの持ち味であり、だからこそテリーだけが……？

テリーの相棒は……？

14カ月前の飛行機事故で子供を失ったのはテリーではなかった。愛する娘ローレンを失ったアッシュ（ドミニク・ウェスト）も同じ立場。ところが娘を失った悲しみから酒におぼれていたこのアッシュも、今はテリーの姿を見ても「君は誰だ？」という始末……。そのうえアッシュの家を訪ねて、しつこく質問を

くり返すテリーに対して、アッシュは「僕には娘はいない！」と答え、困り果てた挙げ句ついに警察を呼ぶことに……。もはやテリーはどうしようもなくなってしまい、絶体絶命の窮地に……。しかし、壁一面に描かれた落書きを見ているうち、遂にアッシュの記憶は……。ここから始まるこの映画の後半は、テリーとアッシュ2人の大活躍が……。さてそれは、何を追求し、何を目指すものなのだろうか……？

なぜ国家安全保障局が……？

アッシュからの通報でニューヨーク市警に逮捕されたテリーだったが、なぜかそこに国防総省直属の国家安全保障局が登場し、テリーの身柄を奪っていった。なぜ、たかがちょっとした住居侵入の通報に対して国家安全保障局が……？

ニューヨーク市警察の黒人女性刑事ポープ（アルフレ・ウッドワード）がそんな疑問を抱いたのは当然……。

そしてポープがテリーからの聞きとりを含めた捜査を進めていくうち、次第に驚愕の事実が……？

他方、テリーを警察に引き渡した直後に娘ローレンの記憶を取り戻したアッシュは、国家安全保障局捜査官たちの車からテリーを助け出そうとしたが、そのため、アッシュは国家安全保障局を敵に回すことに……。警察からも、国家安全保障局からも追われ、どこにも味方がいないテリーとアッシュの2人はこの先一体どうなるの……？

謎の男に注目！

テリーとアッシュの2人の逃走劇の中、突然ある謎の男（ライナス・ローチ）が登場する。パンフレットにはそれが「親切な男」と表示されているが、これが曲者だから、よく注目してもらいたい。もっとも、ここにはそれ以上書けないので悪しからず……。

一切のラブシーンなし！

どんなスリラー映画でも、男と女が登場すれば多少はラブシー的な要素があ

るものだが、この映画に限ってはそれが全然なし。したがってその方面(?)を期待している方にはこの映画はお薦めできない……。

もっとも、テリーは完全に夫やマンズ医師を見限って(?)逃げ出してきているうえ、ある時点からは、「ある確信」をもって行動しているのだから、夫に貞節(?)を守る義務などなくなっているはず。

他方今や、唯一の信頼できる人間であるアッシュと24時間行動を共にしているのだから、アッシュに情が移っても当然。また、いくらテリーが息子のことに必死だといっても、生身のオンナ。したがって当然その方面の欲求も……。

ましてや、2人の逃走劇の中で、テリーの助言(?)に従ってアッシュはあれほど浴びるように飲んでいて酒をやめたほどだから、アッシュだって……? しかし、現実には2人は……?

さて後半の展開とその結末は……?

国家安全保障局の追求から逃げ回りながらテリーとアッシュの2人が求めるものは一体ナニ……? そして、どのような行動によって、その目的に近づいていくの……? 国家安全保障局の追求はなぜ……? そして、国家安全保障局の追求に疑問を抱いたポープ刑事はどんな行動を……? このようにたくさんの疑問点が生まれてくるが、そういう疑問点をうまく持たせるのが、この映画前半のつくり方のうまいところ。

「なんだこんなことか」という単純なネタかもしれないし、「ヘエ、なるほどナァ」と感心するような仕掛けかもしれないが、それは映画を観てのお楽しみに……。

2005(平成17)年8月22日記